

17 王室記録に見られる『東医宝鑑』関連記載の分析

—正祖時代までの記録を中心として—

姜 棹 現, 車 雄 碩, 金 南 一

韓国 慶熙大学校韓医科大学医史学教室

『東医宝鑑』は1610年、許浚によって完成された韓国最高の医書である。この本は王室の医療のみならず、民間でも学習用・診療用などで広く活用されてきた。『東医宝鑑』は2009年8月、学術的な価値のみならず歴史的真正性・世界史的重要性・独創性、記録情報の重要性がUNESCOから認められ、韓国の文化遺産としては『訓民正音』や『朝鮮王朝実録』、『承政院日記』などに引き続き7番目で、医学書籍では世界最初の世界記録文化遺産に登録された。そのため、『東医宝鑑』に関する認識がどのような背景に基づいて成り立ち、どのような過程を通じて成立してきたのかに対する研究が必要であると思われる。本論文では『朝鮮王朝実録』『承政院日記』『日省録』『備辺司謄録』などの多くの編年史資料を調査し、その中から『東医宝鑑』に係わる記録を分析して考察してみた。

正祖時代までの朝鮮王室編年史資料に見られる『東医宝鑑』関連記事の数は、『朝鮮王朝実録』に6件、『承政院日記』に42件、『日省録』に6件、『備辺司謄録』に2件がある。記事の特徴によって分類すると、大きく医学関連記事、刊行及び印刷に関する記事、外交に係わる記事の3種に分けることができる。外交関連記事の中では、『東医宝鑑』に言及した場合が22件で一番多い。次は医学関連記事で19件あり、刊行及び印刷に関する記事が10件だった。この結果を各王代別に検討すると、医学に係わる記事は『東医宝鑑』が発刊された以来、持続的に登場する。それに比べて、刊行及び印刷に関する記事は刊行初期に集中的に見られ、その後はたまに見られる程度である。また、外交関連で『東医宝鑑』の登場する記録は、朝鮮と清朝の公的な交流が始まった顯宗時代から多数出てくる。

医学関連で『東医宝鑑』関連の記録があるのは、王や王族の疾病治療過程で医官が処方あるいは医学的理論を『東医宝鑑』を根拠にして説明する場合や、処方の出所が『東医宝鑑』である場合、また王と医官の医学的討論過程の中で見られる場合がある。これらの記録では処方の根拠として『東医宝鑑』を引用する記事が、他の有名な医書より多い。また処方構成を決める時にも『東医宝鑑』の内容に従うことが多いので、当時『東医宝鑑』が朝鮮の王室医者主要医書であったことがわかる。『東医宝鑑』の刊行及び印刷に関する記事は『備辺司謄録』を除いたすべての編年史資料に登場している。すべての編年史資料の中でも、特に外交関連記録に『東医宝鑑』がよく登場する。記事の大部分が当時の清朝使臣が『東医宝鑑』を要請したとか、朝廷が使臣に与える礼物として『東医宝鑑』を用意したという内容である。持続的に清朝の使臣から要求があったし、また朝鮮政府も接待のために『東医宝鑑』を用意したことから、当時清朝でも『東医宝鑑』の評価が高かったと分かる。

王室の編年史資料の中に登場する『東医宝鑑』関連記事の考察より、『東医宝鑑』は刊行されて以来、その効用性と価値が認められ、短時間に王室医療の主要な医書となったことが分かる。また外交関連記録から、『東医宝鑑』は朝鮮国内に限らず、清朝でも主要な医書としての評価が確立されていたと分かる。